

強いわ デブ剛岩

山牧田 湧進



【まえがき】

※ 「注意ください」

- ・この作品はフィクションです。実在の人物・地名・団体等とは一切関係ありません。
- ・この作品は成人ゲイ向け官能小説であり、男性同性愛を語っています。
- ・同性愛に嫌悪感を抱く方はご覧にならないよう、お願い申し上げます。
- ・この作品は表現の誇張、強調や省略のある、必ずしも現実には即していないファンタジーであることをご了承ください。
- ・特に作品中の性的描写は、現実の性交渉における性病等のリスクを意図的に排除しています。現実と混同しないよう、ご注意願います。
- ・この作品は想像して楽しんでいただくものです。現実との区別を付けられず、犯罪や迷惑行為に及ぶ危険のある方はご覧にならないでください。

【あらすじ】

剛岩……。ごつそうな名前をしているがブヨンブヨンの駄デブ。

でも、不思議なことに奇跡的に精力と性欲がマジで強い。

見た目おっさんだか若者だか判断に迷うような中途半端な無精髭とスポーツ刈り放置のボサボサヘア。

駄デブだけど、肉はまだそんなに垂れてる感じはしないから、思ったよりも若いのかな？ 強いし。

ニートだつっうのに高額な部類のウチの店に連日予約を入れてくる不思議ちゃん。

ノンケだつっうのに男の中でも『流石のガタイのタイガちゃん』と言われる見た目は漢寄りのアタイを連日指名してくる不思議ちゃん。

それもこれも、アタイが毎回尻イキで射精してしまったせいなんだろうけど、アタイに言わせれば客商売でそんなままでさせられるのって間違いなく客側であるアンタのせいなんだから！ って言いたいところんだけど……

なんか知らんけどコイツには何故か勝てないのよ、いつも、いろいろと。

マジでなんなん!? コイツっ！

強いわデブ剛岩

「ちょっと待ってヤダ何それ本気で言ってるのアンタ冗談キツイわよ!」
予約表を見たアタイは思わずホゲた。割りといつでもホゲてるけど。

いやいやいや、これがホゲずにいられますかい!?

『剛岩』・『剛岩』・『剛岩』・『剛岩』・『剛岩』……

予約カレンダーにびっちりと並んで埋まる『剛岩』の羅列。

機械相手に思わず声を出してツツコンでしまったのも無理もないワタシ。

ってか、これは流石にバグかイタズラでしょ!?

速攻でテンチョ（店長）に確認したら、

「こっちだってちょくビックラこいて何度も聞き返したワよ。マジでマジもんよ。
あいつ色んなところがぶっ飛んでんワ。さすが剛岩ツヨイワ」

テンチョの方がもっとホゲてた。ってか昭和の香りまで漂わせてた。本場のバブルのホゲだわ。バブルホゲ。

いやそっかマジでかー。マジでか〜!?

あのお堅い紳士な店長がホゲてるとこ初めて見た。

って、そこじゃなくて連日の『剛岩』。

商売としてはこっちは助かるけど、いやでも他のリピーター様に付け入る隙きすら与えないのはちょっとマイナスかも。

でも短期的にはこれ以上無い利益が出るしなあ。リスクも減るっちゃあ減るし。

ってかその前にアタイの身が持つか心配っ。

こう見えてもアタイはいわゆるアングラの高級娼婦もとい高級娼夫なわけで。

きちっとしたお客様を相手にリアルガチ生でご接待するお仕事をしております。

『きちっと』って言っても病氣持ってないことと金払いがちゃんとしていること、無茶とか犯罪とかしてこないこと以外は不問なんだけどね。

そういう意味では『剛岩』も立派な上客。

こっちがどうこう文句を言うような相手では無い。

んだけど、あいつ確かニートちゃうかったっけ？

しかも、ノンケやろ？

あいつ『ノンケ』って言葉知らんかってんで？

ほんまもんのノンケは『ノンケ』なんて言葉知らんねん。

ノンケの気まぐれで1回経験してみただけ、って客だったはずなのにいったいどうした？

ほんの1回限りのはずが、もう1回来て、もう1回来て、んでこのアリサマや。

アタイにハマってくれたんなら喜ぶべきなんだろうけど、アタイはアイツちよっと苦手やねん。

だって……

「ふふふ……フヒヒヒ……来たでえ？」

「い、いらっしやいませ。ご、指名ありがとうございます……」

「おうおう、どんな客にもっこり営業スマイル。従業員は辛い〜いい〜、つてか？」

くっそこのやろ、初っ端からムカつくつ。

「もっと本性現しても良いんやで？ ほんまはイヤなんやろ？」

キツ！ こおんのクソデブ性欲ぶっ壊れニートが！

仕事を忘れて、思わず本意気で嫌悪感たっぷりに睨み付けてしまいましたわ。

「そうそう、その顔！ その顔しながらイクんねんな、あ？」

突然カーラーっと、アタイの顔がポーポーに燃え上がって、火を噴いた。

「心配せんでも、みっちみちに詰め込んで、オレの精子以外なんも無いってくらいオレ専用のおまんこに染め上げたるさかいな？」

「あ、あああ、アンタ何それ腹立つ、こっちは仕事でもなきやアンタなんか……」

「仕事なのに、射精しちゃって良いの〜？」

クソっ。凶星なだけに何も言えねえ！

「普通、営業だったらイク振りだけでもんな。なのに、タイガちゃんたらすっごいイヤそうな顔しながら本当に射精してイッチャうんだもん」

「そっそれはアンタが！」

「オレのことタイプ？ ひよっとして」

が……と、さらに頭に血が上ってアタイは訳分かんなくなつた。

「んなわけあるかあ！ このクソデブ肉豚無駄巨根無駄精力バカ無駄精子製造マ

シンがあ！」

「タイガちゃんはそのうのが好きかあ」

アタイは我を失ってたけど、流石にその一言で目が覚めた。目は覚めた。血は上りつ放しだったけど。

「そ、そそそんなことあるわけじゃない？ アタイはちゃんとした容姿端麗で紳士な殿方がタイプなの！」

「ふうん。まあ理想と現実が違うことは良くある……」

「なんかアンタ勘違いしてない？ だいたいアタイがアンタみたいな贅肉だらけの駄デブの癖に何故かやたらと性欲と精力だけは強くなって日常の動作すら体重重過ぎて覚束ないってのにセックスだけは無茶苦茶頑張れるなんてワケ分かんない奴なんかをイける訳が無いやんけ、つつう話よ！」

「でもタイガちゃん、オレでイッたよね？ 前日も、前々回も、初めてのときも」

「そ、そそそれは一時の気の迷いというか偶々というか偶然というか……」

「そんな簡単にイケるもんなの？ 男の尻って」

「いや、流石に竿扱いてイクほど簡単じゃない……、って何真っ当に返答してんだアタイは……？」

「他の客でもイッてんの？ タイガちゃんは」

「イクわけねえだろ！ 客商売でいちいちイッてたら身が持たんわ！」

ハッ！ ひよっとして今アタイ、語るに落ちた!? ねえ、落ちた!!?

「やっぱ、オレのことイケんじゃん、タイガちゃんは」

なんかね、もうね、いろいろとね、我慢がならないのよアタイは。

「よおし、このブタ野郎、ちよっとそこに正座しろ。今日という今日はきっちりみっちりとお説教してやる」

「お？ おしゃべりの時間を引き伸ばして何とかやり過ぎそうって魂胆かな？

風俗あるある」

「くっそ畜生！ こちとらこれでもプライド持って客商売やってんだよ！ おら、

さっさとおっぱじめるぞ、このブタ野郎!!
完・全・敗・北……

(こちらは体験版です)



強いわデブ剛岩

OpusNo. Novel-083
ReleaseDate 2022-12-01
CopyRight © 山牧田 湧進
& Author (Yamakida Yuushin)
Circle Gradual Improvement
URL gi.dodoit.info

個人で楽しんでいただく作品です。
個人の使用範疇を超える無断転載やコピー、
共有、アップロード等はしないでください。
(こちらは体験版です)